

中東地域の日本語教師の感じる困難

—中東日本語教育セミナーの意見から—

小熊 利江

要 旨

本稿は、これまで情報の少なかった中東地域の日本語教育における現状と課題について報告を行う。中東各地から日本語教師が集まった中東日本語教育セミナーの内容をもとに、日本語教育を行う上での困難点を中心にまとめた。

教師の意見には 26 項目の問題が表され、日本人教師が海外で様々な困難を感じている様子が見られた。指摘された問題のうち、中東地域に特徴的なものとして宗教や政治に関するものが挙げられ、日本人教師が海外で効果的に日本語教育を行うためには、現地の事情や異文化を理解することの重要性が確認された。また、教師自身の未熟さによる問題もあり、地域セミナーの内容についても再検討する必要があることが示唆された。海外で、特に孤立しがちな地域の教師が、他の教師と悩みを共有し情報交換することを通じて精神的に支えられる。そのためには、地域ネットワークなどの場が形成されることの必要性が改めて認識された。

【キーワード】 海外の日本語教育、 中東地域の問題点、 地域事情と異文化の理解、 地域セミナー、 情報交換ネットワークの形成

1. はじめに

現在、世界の様々な地域で日本語教育が盛んに行われており、学習者は年々増え続けている。国際交流基金の調査『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2003 年－』（2006、以下『海外の日本語教育』とする）によると、2003 年現在、日本語教育は 127 か国で行われ、学習者数は 235 万人余に上る。日本で日本語を学習する 13 万人余(文化庁調査)を大きく上回っており、海外における日本語教育の重要性が高まっていることがわかる。

しかし海外での日本語教育は、日本とは多くの面で異なることが予想される。李(2003)は「日本式学習スタイルに合わせて養成された多くの日本語教師たちは、世界のあらゆる地域に送り出されるわけであるが、世界の多様な学習スタイルと多様な学習環境に置かれている学習者に対してどれほどの応用力を持って適応できるか、疑問である」と述べている。地域によっては日本では予想しなかった困難な状況に直面することも考えられる。

海外の日本語教育における問題については、『海外の日本語教育』の中でも報告されている。しかし、中東地域¹は日本語学習者の数が全体の 0.1%と少ないため、「中東・アフリカ地域」として大きく一括りにされている。その上、中東地域から情報発信

されることはほとんどなく、これまで実情があまり知られてこなかった。

本稿では、中東地域の日本語教師の抱える問題について報告を行い、その傾向について考察する。さまざまな地域の状況を把握することは、海外での日本語教育について、あるいは日本語教師研修の内容などを考える上で有意義であると考えられる。

2. 中東地域の日本語教育の歴史

1972 年の第一次石油危機の後、日本にとって中東諸国との関係は重要度が格段に高まったと言える。2003 年度の日本の石油輸入相手国を見ると、中東地域の国々が全体の 88.5%を占めている²。このような国際情勢を背景に、国際交流基金によって日本人教員が派遣されるなど人的にも物質的にも日本側からの強力な支援を受け、1974 年にエジプト、1986 年にトルコ、1994 年にイランとサウジアラビア、2002 年にシリアの大学に日本語や日本文学の専攻課程が開設された³。

現在、中東地域で日本語教育機関のある国は 15 か国あり、そのうち国際交流基金や国際協力機構(以下、JICA とする)によって日本語教師が派遣されている国は 8 か国、NGO からの派遣が 1 か国である。他に、現地に定住している日本人や現地語母

語話者(以下、現地人とする)の教師がいるが、日本語教師になるための研修を受けていない教師や経験の浅い教師も多い。日本語教育に関する有益なリソースにアクセスできない地域もある⁴。

また、中東地域で大学の常勤教員として雇用されるには、現地人には博士号の所持を条件としているところが多い。1991年にトルコ、2004年にエジプトで日本語や日本文学関係の博士課程が設置された⁵が、それ以外の国では、博士号を取得するために日本などへ留学しなければならない。このような学位重視社会の下、現地人の大学常勤教員は博士号のない日本人教員を格下と見る傾向がある。多くの現地人教師は助手や非常勤教員であり、収入や地位が不安定なため人数が不足している状況が続いている⁶。

3. 中東日本語教育セミナー

3.1 中東日本語教師連絡会⁷

日本語教育の環境が整っていない地域で日本語を教える教師と学習者を支援する目的で、国際交流基金カイロ事務所を中心にして1999年に中東日本語教師連絡会が発足した。

中東日本語教師連絡会によって2001年から毎年、中東日本語教育セミナーがエジプトにて開催されている。セミナーの主な目的は、日本から講師を招いて、中東各地の日本語教育関係者が研修を受け、情報交換することである。

3.2 「中東日本語教育セミナー2003」の内容

2003年9月には2日間の日程で、中東日本語教育セミナーが開催された(表1)。この年は、日本語学や教授法の講義を行った過去2回のセミナー内容と異なり、「困難な状況における日本語教育」という

テーマが設定され、教師たちが中東地域で日本語教育を行う上で困難に感じている点について意見交換の活動を行った。表中の講演1と講演3は佐久間勝彦氏(聖心女子大学教授)、講演2は荒川友幸氏(国際交流基金カイロ事務所日本語教育アドバイザー)によって行われた。

「中東日本語教育セミナー2003」には、日本語教師として8か国から17機関、37名が参加した。エジプトから26名(うちエジプト人7名)、シリアから4名、トルコから2名、クウェートから1名、サウジアラビアから1名、チュニジアから1名、バーレーンから1名、モロッコから1名が参加した。セミナーがエジプトで開催されたため、エジプトからの参加者が最も多く全体の3分の2を占めた。現地人教師としては、開催国に住むエジプト人教師のみが参加し、他の中東各地の現地人教師は主に経済的な理由によって参加していない⁸。

その他、エジプトとシリアから日本語教師派遣機関であるJICAの調整員2名、日本からアラビア語教師1名が参加した。セミナーの参加者および所属機関について、詳しい情報を表2に示す。

4. 研究の目的

「中東日本語教育セミナー2003」の内容をもとに、中東地域における日本語教育の現状と課題に関する情報の発信を目的とする。特にセミナーのテーマである「困難な状況における日本語教育」について、教師の意見を中心に報告した上でそれらを集計して、中東地域の日本語教師の抱える問題の傾向を具体的に示したい。

またその結果から、海外の地域セミナーの位置づけや意義に着いても考察する。

表1 「中東日本語教育セミナー2003」のプログラム

1日目	09:00-09:15	オープニング
	09:15-10:15	講演1「困難な状況における日本語教育 その1」
	10:30-13:00	講演2「「辺境」における日本語教育の現状と展望」
	13:00-14:00	(昼食)
	14:00-16:00	各地域の報告と討論1
2日目	09:00-12:00	各地域の報告と討論2
	12:00-13:00	(昼食)
	13:00-16:00	講演3「困難な状況における日本語教育 その2」と全体討論

表2 「中東日本語教育セミナー2003」の参加者

所属機関名	国	教育段階	日本語講座の種別	レポート提出	参加者数と国籍
アインシャムス大学	エジプト	大学	専攻	あり	5名(日本人)
カイロ大学	エジプト	大学	専攻	なし	4名(エジプト人)
アレキサンドリア大学	エジプト	大学	選択外国語	あり	2名(日本人)
セッタ・オクトーバー 観光学園大学	エジプト	大学	選択外国語	なし	1名(日本人)
ヘルワーン大学	エジプト	大学	課外授業	あり	2名(日本人)
エジプト日本語教育 振興会	エジプト	社会教育	公開講座	なし	6名(日本人) 3名(エジプト人)
国際交流基金 カイロ事務所	エジプト	社会教育	公開講座	なし	2名(日本人)
—	エジプト	—	個人教授	なし	1名(日本人)
ダマスカス大学	シリア	大学	専攻 公開講座	あり	2名(日本人)
アレppo大学	シリア	大学	選択外国語 公開講座	あり	2名(日本人)
チャナッカレ 3月18日大学	トルコ	大学	専攻	あり	1名(日本人)
アナドル商業高校	トルコ	高校	選択外国語	あり	1名(日本人)
クウェート大学	クウェート	大学	公開講座	なし	1名(日本人)
キングサウド大学	サウジアラビア	大学	専攻	なし	1名(日本人)
チュニス外国語大学	チュニジア	大学	選択外国語	あり	1名(日本人)
バーレーン大学	バーレーン	大学	選択外国語	あり	1名(日本人)
教育省市民講座		社会教育	公開講座	あり	
モハメド五世大学	モロッコ	大学	選択外国語 公開講座	あり	1名(日本人)
JICA エジプト事務所	エジプト	—	—	—	1名(日本人)
JICA シリア事務所	シリア	—	—	—	1名(日本人)
東京外国語大学 (アラビア語教師)	日本	大学	—	—	1名(日本人)

5. 分析データ

本稿で用いるデータは2種類ある。「中東日本語教育セミナー2003」の前に教師から提出されたレポートと、セミナー当日の討論内容である。

セミナー参加予定の日本語教育機関には事前にレポートの提出が依頼され、レポートは資料として参加者に配布された。レポートの内容は、自国内の日本語教育事情および所属機関の紹介と、日本語教育上の困難点についての報告である。セミナーでは、レポートに記された各地域の困難点について具体的な問題をふまえた上で討論が行われた。

6. 事前のレポート

6.1 中東地域の日本語教師が感じる困難

表2からわかるように、事前にレポートを提出したのは日本人教師のみであった。レポートから日本語教育上の困難点に関する記述部分を抜き出し、要点をまとめて表③に示す。その結果、困難の種類は20項目に分けられた。

最も指摘の多かった「(1)授業時間数が少ない」問題については、いくつか原因が記されていた。日本語が選択科目の場合には時間割の決まるのが後回しにされるため授業開始時期が遅れることや、専攻科目の場合も実際に授業が始まる時期が予定より遅

表3 困難の種類

指摘数	問題	指摘した機関数と国名
6件	(1) 授業時間数が少ない	エジプト2、シリア1、チュニジア1、バーレーン1、モロッコ1
5件	(2) 教師の不足	シリア3、サウジアラビア1、モロッコ1
4件	(3) 学習者の動機付けが低い	シリア1、トルコ2、サウジアラビア1
3件	(4) 学習者が日本語に接する機会が少ない	シリア2、トルコ1
2件	(5) 教材の不足	エジプト1、トルコ1
	(6) 教室など施設が不十分	エジプト1、チュニジア1
	(7) 学習者が日本語学習を軽視する時期がある	エジプト1、シリア1
	(8) 教師が2年前後で交替するので、カリキュラムや教材の継続性が低い	トルコ2
1件	(9) 教育機関による教師採用の条件が悪い	トルコ1
	(10) 日本語教育に対する大学側の態度が消極的	エジプト1
	(11) 大学の設定するカリキュラムがよくない	サウジアラビア1
	(12) 学習者の学力レベルが低い	トルコ1
	(13) 学習者の態度が悪い	トルコ1
	(14) 学習者の学習意欲が低い	チュニジア1
	(15) 学習者が成績に神経質になりすぎる	バーレーン1
	(16) 教師の能力不足	シリア1
	(17) 日本人教師が現地人教師と関わりを持たない	エジプト1
	(18) 教師は専門日本語の勉強が必要	エジプト1
	(19) 教師に異文化生活ストレスがある	シリア1
	(20) 学習者が集まらず初級レベルしか開講できない	バーレーン1

れることなど、3件が大学側の不手際やだしなさによるものとされた。また、イスラム教の断食月には約1ヶ月間の短縮授業となること、教師も学生も断食しているため学習が捗らないことから実質的な学習時間がさらに短くなることが指摘されていた。

大学の授業時間数は学期に10～13週あり、日本の大学より若干少ないがほとんど変わらない。しかし学期中に断食月が入ることで学習が途切れ、授業進度が遅れることから、授業時間数の不足を強く感じる要因になっているのかもしれない。

「(2)教師の不足」に関する意見の中では、現地語を話す日本語教師の不在についても5件指摘されていた。日本人教師の語学力不足のため所属機関との事務連絡や教材作成に支障をきたす、学習者が教師に不満を伝えられずストレスを感じているという意見もあった。

「(3)学習者の動機付けが低い」は「(14)学習者の学習意欲が低い」とも関連がある。この問題については、自国内に日本語を活かした就職口が少ないからではないかと理由付けられていた。他に、テストの成績が悪かったために日本語学科に入学せざるを得なかった学生が多く、学生が日本語にあまり関心を示さないという機関もあった。

その他、2件の指摘があった「(5)教材の不足」では、販売数と価格の問題で日本に関する書籍に手が届かないことが記されていた。日本の出版物が全く販売されていない国もあり、クレジットカードを持たないためインターネットでも書籍を購入できない状況もある。

「(6)教室など施設が不十分」については、発展途上国では学生数に対して大学の施設が足りず教室の確保が難しいこと、使用教室が一定せず教材など

表4 困難点の分類

(a) リソース関連 <2件>	(5) 教材の不足 (2件)
(b) 設備関連 <2件>	(6) 教室など施設が不十分 (2件)
(c) 学習者関連 <14件>	(3) 学習者の動機付けが低い (4件) (4) 学習者が日本語に接する機会が少ない (3件) (7) 学習者が日本語学習を軽視する時期(試験期間など)がある (2件) (12) 学習者の学力レベルが低い (13) 学習者の態度が悪い (14) 学習者の学習意欲が低い (15) 学習者が成績に神経質になりすぎる (20) 学習者が集まらず初級レベルしか開講できない
(d) 教師関連 <12件>	(2) 教師の不足 (5件) (8) 教師が2年前後で交替するので、カリキュラムや教材の継続性が低い(2件) (9) 教育機関による教師採用の条件が悪い (16) 教師の能力不足 (17) 日本語教師が他の科目の教師と関わりを持たない (18) 教師は専門日本語の勉強が必要 (19) 教師に異文化生活ストレスがある
(e) その他 <8件>	(1) 授業時間数が少ない (6件) (10) 日本語教育に対する大学側の態度が消極的 (11) 大学の設定するカリキュラムがよくない

が置いておけないこと、語学学習に向かない教室を使用していることなどが記されていた。これについては後のセミナー討論で、授業を階段や屋外で行っているとの報告があった。

6.2 困難点の分類

レポートで指摘された20項目の問題点を、『海外の日本語教育』における「日本語教育上の問題点」と同様に、5つのカテゴリー「(a)リソース関連」「(b)設備関連」「(c)学習者関連」「(d)教師関連」「(e)その他」に分類し整理する。

レポートの意見は表4のように、「(a)リソース関連」2件、「(b)設備関連」2件、「(c)学習者関連」14件、「(d)教師関連」12件、「(e)その他」8件がそれぞれ当てはまった。これを見ると、レポートで述べられていた中東地域での問題は「(c)学習者関連」と「(d)教師関連」のものが特に多いと言える。

6.3 『海外の日本語教育』との相違

ここで、『海外の日本語教育』における「中東・アフリカ地域」の結果から、中東地域の数値のみを抜き出して、再計算を行ってみる⁹。その結果、中東地域の問題点は「(a)リソース関連」20.2%、「(b)設備関連」25.3%、「(c)学習者関連」10.1%、「(d)教

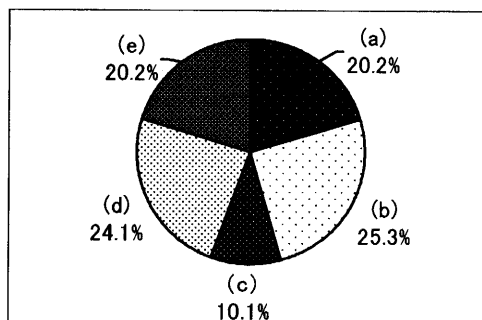


図1 『海外の日本語教育』から中東地域をみの計算結果

師関連」24.1%、「(e)その他」20.2%となった(図1)。

『海外の日本語教育』は選択回答式のアンケート調査であるため、今回の自由記述のレポートとは結果に相違が見られた。

『海外の日本語教育』で指摘の多かった「(a)リソース関連」「(b)設備関連」について、レポートではあまり指摘されていなかった。相違の原因として、セミナー参加者がみな中東地域の教師であるため、レポートではリソースや設備の不十分なことが共通認識として予め考慮されていた可能性が考えられる。また、レポートを作成したのが全て日本人教師であったため、日本文化や教材などの情報が比較的入手

しやすいことも考えられる。それに対して、国際交流基金の調査には、現地の窮状を日本に向けて訴える教育機関が多かったのかもしれない。

一方、レポートでは「(c)学習者関連」についての指摘数が多かった。セミナーでは、教師が話し合うことで改善される見込みのある「(c)学習者関連」の問題について、話題として取り上げたいという意識の違いが考えられる。

7. セミナー討論

中東日本語教育セミナーでは、レポートの内容をふまえて参加者が討論を行い、各地域の問題を共有して解決策を検討した。討論を通して、(1)から(20)の問題について自国の日本語教育機関でも起こりうる、あるいは状況が理解できる問題であると認識し合った。

レポートに記された 20 項目の他に、セミナーでの討論を通して新たな問題点も提起された。上記(1)～(20)と内容的に重ならないものとして、以下の 6 項目が挙げられる。

- (21) 国内の各日本語教育機関の授業内容について相互把握が欠けている。
- (22) 日本文化を教えることが宗教的にそぐわないことがある。
- (23) 中東地域特有の学習スタイルがあり、日本人教師は異なる学習スタイルを知り適応する必要がある。
- (24) 日本からの協力や援助が足りない。
- (25) 国際交流基金や JICA などに現場の声が届いていない。
- (26) 政治情勢によって対日感情の良し悪しがあり日本語学習に影響する。

まず(21)については、同国内の日本語教育機関であっても、互いに交流がないことを認識した。授業内容を相互に把握することで、学習者への情報提供や効率のよい指導につながるとの意見があった。

(22)に関しては、中東地域で信者の多いイスラム教の社会的ルールに違反するような日本文化もあり紹介しづらいと述べられた。例えばサウジアラビアなどの国では女性が肌や髪を全く露出してはいけないなど様々な制約があり、一般の教材が使用しにくく、提示に相応しい写真やビデオ教材を選ぶことが難しい。また、相手の家族内の女性について尋ねるのが失礼であることなど、授業活動を行う判断も難

しいことが挙げられた。

(23)の「中東地域特有の学習スタイル」としては、イスラム教徒は聖典コーランを暗記すべきだとの考えに関連して学習者が暗記学習に慣れていることが挙げられた。また、教室で自分の意見を述べる習慣がないこと、教室活動よりテスト成績を重視することなども述べられた。それに対して、日本人教師はコミュニケーションな授業や教室活動をさせようとする固定した教授スタイルを持ち、学習者のスタイルと適合していないことが問題だという意見が出された。

(24)と(25)はエジプト人教師の意見だが、日本からの援助に対する不満である。具体的には、日本政府の援助によって LL 教室が設置されたものの LL 機器がほとんど使われていないこと、図書室には文学全集のような書物の寄贈が多いが利用者がほとんどいないこと、雑誌やマンガなどを寄付して欲しいが認められないこと、もっと日本へ行かせて欲しいことなどが挙がっていた。

(26)の問題については、近年の中東情勢、アラブ民族のなかで強まる反米感情に伴い、反日感情が高まっていることが述べられた。日本がアメリカの同盟国としてイラク戦争などに加担していることから、日本語学習意欲の低下や授業ボイコットによる学習進度の遅れを引き起こしていることが報告された。

8. 総合的考察

8.1 中東地域の特徴

「中東日本語教育セミナー2003」の意見のなかで、イスラム教の断食月が影響すると考えられる「(1)授業時間が少ない」と、「(22)日本文化を教えることが宗教的にそぐわない」「(23)中東地域特有の学習スタイルがある」などに表れた宗教的な要素が、この地域の特徴として挙げられるのではないだろうか。中東地域ではイスラム教が広く普及しており、この地域の社会や政治、経済に宗教が深く浸透し、人々の思考にも大きく影響を与えている。イスラム教に関する知識が足りないと、特に厳格な国の多い中東地域の学生には不愉快な思いをさせる可能性がある。

また、「(26)政治情勢によって対日感情の良し悪しがあり日本語学習に影響する」に表れた政治的な要素も挙げられる。反日感情へとつながる反米感情は、米国がイスラム教徒に戦争をしかけているとの

認識から発生していると言われ、この問題も宗教と関連があると考えられる。

エジプト人教師からは、「(24)日本からの協力や援助が足りない」「(25)国際交流基金や JICA などに現場の声が届いていない」などの意見が出され、日本の援助を強く求める姿勢が見られた。発展途上国では、独力で訪日したり教材を入手したりする機会の少ない現地人教師に、日本からの支援を期待する傾向があるのではないだろうか。また、イスラム教徒には裕福な者が貧しい者を金銭的に支援する義務があるため、同様の思考から日本に対する要望が表明されたことも考えられる。この問題にも宗教が関わっている可能性がある。

8.2 異文化の理解

指摘された問題のなかには、「(19)教師に異文化生活ストレスがある」や「(23)中東地域特有の学習スタイルがあり日本人教師は異なる学習スタイルを知り適応する必要がある」のような教師の異文化理解に関するものが見られた。

「(2) 教師の不足」の中でも述べられたように、この問題は日本人教師が現地語または英語などを十分に話せないことによる意思疎通の不足が関係しているように見受けられる。このことが「(17)日本人教師が現地人教師と関わりを持たない」ことにも影響し、現地人との人間関係の構築や現地の文化理解ができない一因となっていると考えられる。

異文化の問題が多く挙げられたということは、海外で効果的に日本語教育を行うには、教師が現地の事情を学習することの重要性を示していると言える。

8.3 教師の未熟さによる問題点

「困難」とされた項目のなかには、教師の未熟さによる問題点も多く含まれている。「(16)教師の能力不足」という指摘は、経験の長い日本人教師から出されたものである。

セミナー会場では日本人教師が、所属機関や現地人教師、学生について不満や苦情を言い合う様子が観察された。自分の苦境を理解してもらうことでストレスを解消し、さらに他者との連帯から安心感を得るなど心理面での良い作用があると考えられる。

海外で、特に日本語教育の盛んでない地域においては、待遇や条件の悪さから日本人教師の募集が難しい。中東地域も含めてこのような地域では、経験の浅い教師が多いのは避けられない状態である。

しかしながら様々な問題への取り組みなど困難な環境との相互作用を通して、個々の教師の成長へとつながる可能性を見出すこともできるのではないだろうか。孤立しがちな地域の教師たちが自分の状況について誰かに訴え理解を求めることも方策であり、そのようなことを可能にする場の提供が必要とされている。

8.4 課題への取り組み

様々な問題を抱える海外の日本語教育の質的向上をはかるには、まず一地域の問題を明らかにし、他の地域の教師と問題意識を共有することから始められる。環境の似ている地域から外の世界へと問題意識を広げることができれば、解決策が考案されることが期待できる。それには、教師同士が気軽に相談しあう環境や情報交換の場、地域のネットワークの形成が重要である。これはよく言われていることではあるが、ネットワークが実現し適切に機能している地域はまだ少ない。

また、地域セミナーでは一般に日本語学や教授法に関する教師研修が行われる傾向がある。しかし現地人教師と日本人教師の間には知識や意識の違いがあり、適当な研修内容も異なると推察される。経済的な理由から、地元以外の現地人教師が参加できない状況も存在する。セミナーの開催には、地域ごとの特徴や対象者のニーズを事前に詳しく把握して、個々の地域に即した研修内容を検討することが望ましい。参加者をグループ分けするなどの対応も考えられる。

9. おわりに

中東日本語教育セミナーでの討論およびレポートに基づき、中東の地域的な特徴について検討した。

その結果、日本語教育上の困難点として宗教や政治などに関連する問題が挙げられ、日本人教師が海外で効果的に日本語教育を行うためには、地域の文化や事情について十分に理解することの重要性が確認された。

このセミナーの参加者は、中東地域で日本語教育が行われている 15 か国のうち 8 か国のみからであり、しかも参加者 37 名のうち 30 名が日本人であった。今回の報告で現地の状況が十分に把握できているとは言えないため、さらに調査を行い、足りない点を補いたい。

また多くの調査では、教師から意見を収集する

ためか、指摘される問題には教師自身に関するものが少ない傾向がある。海外で地域セミナーを開催するには教師の実情を把握し、その地域の教師の研鑽には何が必要かを事前に調査することが有益であると考えられる。本稿に挙げられた困難点を鑑みると、中東地域の日本人教師には、日本語学的な知識や指導方法より、異文化への理解や適応に関する研修内容のほうがより必要とされていることが推察される。

注

1. 中東とは、東はイランから西はエジプトまで、北はトルコから南はアラビア半島南端までの地域を指す。一般にはモロッコなどアフリカ北部も含める(『世界年鑑』2003)。本データを収集した2003年現在、中東地域には22か国ある。
2. 東京電力ウェブサイト「エネルギーなんでも大百科ー日本の石油輸入相手国」参照。
3. 1968年にイスラエルの大学で日本語課程が設置されているが、日本側からの援助は行われていない。
4. 国際交流基金ウェブサイト「日本語教育国別情報」参照。
5. 『海外の日本語教育』によると、これらの大学において実際に学位が授与されることはほとんどない。
6. 国際交流基金ウェブサイト「日本語教育国別情報」参照。
7. 中東日本語教師連絡会には2003年9月現在イラン、エジプト、クウェート、サウジアラビア、シリア、チュニジア、トルコ、バーレーン、モロッコ、ヨルダンの10か国から日本語教師の参加がある。
8. その後、中東日本語教育セミナーのエジプト以外の中東諸国からの参加者には、国際交流基金から滞在費・旅費の一部補助が行われるようになった。
9. 『海外の日本語教育』は(a)~(e)の分類項目のうち最も

高い項目の数値を用いた。

参考文献

- 李徳奉 (2003) 「転換期を迎えた日本語教育に求められるもの」『日本語教育』119, 1-10.
- 小熊利江 (2005) 「中東地域の日本語教師たちの感じる困難」お茶の水女子大学言語文化学研究会口頭発表、『言語文化と日本語教育』31, 90-93.
- 共同通信社 (2003) 「中東・北アフリカ」『世界年鑑 2003』277-328.
- 国際交流基金 (2001) 『第3回海外日本語教育支援団体懇談会「各国の日本語教育に対する日本側の支援についてー日本に期待されていることー」議事録』国際交流基金
- 国際交流基金 (2006) 『海外の日本語教育の現状ー日本語教育機関調査・2003年ー』国際交流基金
- 国際交流基金ウェブサイト「日本語教育国別情報」
<http://www.jpff.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2004/index.html> 2006年3月15日参照
- 国際交流基金日本語国際センター (2003a) 『中国日本語事情』
- 国際交流基金日本語国際センター (2003b) 『ロシア・NIS諸国日本語事情』
- 佐久間勝彦 (2002) 「第二外国語としての日本語教育について」『国際交流基金バンコック日本語センター紀要』5, 11-18.
- 東京電力ウェブサイト「エネルギーなんでも大百科ー日本の石油輸入相手国」
<<http://www.tepco.co.jp/custom/LapLearn/world/imc01-j.html>> 2006年3月15日参照
- 文化庁ウェブサイト「日本語教育の充実」
<<http://www.bunka.go.jp/1kokusai/frame.asp?0fl=list&id=1000001823&clc=1000000049>> 2006年3月27日参照

おぐま りえ／稚内北星学園大学 留学生別科

rieoguma@hotmail.com

Difficulties in Teaching Japanese Language in the Middle East

— Teachers' opinions at the regional seminar —

OGUMA Rie

Abstract

This paper reports the situation and problems of teaching Japanese in the Middle East region, where only little information has been given so far. It reports the contents of the 'Middle East Japanese education seminar', which Japanese teachers in the Middle East attended and discussed over the theme of 'difficulties in teaching Japanese in the Middle East' in.

There mentioned 26 kinds of difficulties in the seminar. By categorizing these 26 problems, it revealed that 'learner related' and 'teacher related' problems are the most common noticed in the Middle East, which disagrees with the results of the report "Current Report on Japanese-Language Education around the Globe" (2006).

Besides, the matters related to religion and politics were often mentioned, which are considered as specific features of the Middle East. The religion, Islam, gives much influence to the thoughts and the customs of the people in the region and it also influences the Japanese learning, such as their learning style, motivation, activities in the class, etc. For the effective teaching abroad, it is important for the teachers to have good knowledge of the culture and conditions of the region, and to build a network which makes it easier to exchange information.

【Keywords】 teaching Japanese language in foreign countries, problems in the Middle East, understanding regional cultures, regional seminar for teachers of Japanese language, network building in the region

(International Student Center, Wakkanai Hokusei Gakuen University)